

芸大通信

2005年2月発行
Vol.003

京都市立芸術大学広報誌

KUJUNEN

CONTENTS

- 国際交流・国際交流室の3年間
- 留学生寄稿・新たな創作
- 留学生寄稿・青春時代を過ごした場所
- 留学生寄稿・京都芸大に来た「きっかけ」
- 音楽学部・演奏旅行を終えて
- 日本伝統音楽研究センター・教員の紹介
- 卒業生寄稿・近況報告

国際交流室の3年間

国際交流アドバイザー 玉村 奈緒子



9月のある晴れた日のこと、芸大中央棟の2階、南に面した階段脇の手摺にずらりと布団が干されます。秋の日差しに膨らんだ色とりどりの毛布や掛敷布団をパタパタと叩くのは学生課の職員の面々——10月から3ヶ月間本学に滞在する美術学部交換留学生(イギリス、フランス、カナダ、フィンランド、イタリアから計8名)に貸出す寝具の手入れの風景です。何年間も滞在する文部省奨学金による研究留学生や私費留学生と違って、短期の交換留学生には住居の世話をすることが海外の各大学との交換協定に明記されています。こちらから派遣する学生達が家具付きの寮やアパートに入れてもらっていることを考えれば、僅か3ヶ月の滞在のために必要な品を全て購入しるとはとても言えません。というわけで、この「布団干し」なのです。

この時期、国際交流室は不動産屋の事務所に早変わりします。大学付近の民間アパートを管理するエージェント、そのアパートとの連絡窓口である学生課の職員、4月から交換留学生の送出しと受入れの準備を私と共にずっと担当してきた教務課の職員、留学生を受入れる専攻の先生方、国際交流委員長、日本語の解らない交換留学生達。私も含めた全員が日本語で書かれた賃貸契約書を囲み、様々な説明や質問が飛び交い、署名捺印が行われ(保証人として契約書に判を押すのは受入れる各専攻の先生です)、家賃のお札が数えられ、寝具や鍋釜一式が貸出され…そして、誰からともなくこの言葉が呟かれます:「ああ、うちの大学にゲストハウスがあれば…」

しかし、ハード面の不足をソフト面の頑張りでも補うのが芸大の伝統(?)です。私が国際交流アドバイザーとして赴任したのは2001年4月、国際化の時代に対応すべく芸大に国際交流室が初めて設置された時のことでした。以来3年半、美術音楽両学部、総務、教務、学生課という縦割り組織を横に貫くような形で様々な国際交流の仕事に従事してきたわけですが、どの場面でも確実に仕事を支えてくれる熱心な(とてもお役人とは思えない?)職員の方々に助けられました。

大学の国際交流には色々なレベルのものがあります。専攻単位で行うもの(例えばフランスと独自の交流を続けているビジュアルデザインや、音楽学部の各専攻が海外から講師を招いて開催するマスタークラス等)や、各先生方が個人レベルで行うものもあります。私が担当しているのは主として全学レベルや学部レベルで行う交流で、先に述べた留学生交換のための海外諸大学との協定・交渉や、派遣・受入れ留学生の世話以外に、2001年秋にはイタリアのシエナ大学から初めて教授陣を招き、国立京都国際会館で文化遺産保存のための日伊国際シンポジウムを開催。翌2002年秋には音楽学部創立50周年記念の催しとして、学生達の弦楽オーケストラを26日間ドイツに派遣(演奏会8回)。1週間だけ同行した私は最大級の歓迎を受けた学生達と共に国際交流の醍醐味を味わうことができました。そして3年目の2003年秋にはシエナ大学で開催された日伊国際シンポジウムに副学長や7名のパネラーの先生方と共に参加。振り返ってみれば実りある3年間でした。これからはどんな国際交流が展開されてゆくのか、どうぞ皆様お楽しみに。

新たな創作

産業工芸・意匠 姜 基 勇



展覧会風景



展覧会風景

胸騒ぎした初めての個展は私にとってモノ作りをする人間としての出発であった。

どきどきしながら会場で私の作品を見に来てくれた人達と作品の話をしながら、自分が作った作品の前で初めて自分の作品を他人のモノのように見たことがある。何を表現したか、なぜこのような形になったか、とか…。そして、自分に戻って、また自ら考えた時、恥ずかしくて人の前に立つことが出来なかったことがあった。

自分の作品に対して自信がなかったからだろう。

その後、私はモノ作りの創作って何なのか、時々自分自身に質問するようになった。

モノって何なの、形を作ること、なぜ表現したとか等々。

この答えは簡単に出てくることではなかった。それはその時、自分がモノに対して意識していることはあまりにも少なかったし、ただ描くこと、綺麗に表現することを優先してしまい、自分の感情のないモノの表現になったからだと思う。2年後、2回目の個展の時もその答えを見つけることは出来なかった。私は自分自身のことを信じるのがいやになってしまった。一言で分からなくなった。

今考えてみるとモノは単純に作るのだと思い、目に見える外形を大事にしてしまっ、自分自身の中で考えていることに対する表現が出来なかったからだと思う。

数ヶ月後、私は新しい環境で自分自身を探したいと思い、日本に留学することを決めた。

芸大に入ったばかり、改めてモノ創りのことを考えてみた。しかし、緊張してどうやってこの大学で勉強すればよいか、よく分からなくて迷ってしまった。それは自分が考えているモノに対することが、表現可能になるか不安に思ったからであった。さらに言葉の問題、その上違う習慣、価値観等、私にとって理解出来ないところは多かった。この中で一番心配したのは制作に対する考え、モノに対する見方であった。

ある日、中野光雄先生(2001年退官、現大手前大学メディア・芸術学科教授)とお話したことがあった。先生は突然、「君は何の為にこの大学に留学したの」といきなり聞かれた。私は先生の質問に答えることが出来なかった。先生は「留学することは自分が育った国の環境と違うところで違う文化を学ぶことです。即ち、その国の文化を学ぶことが大切なことである。ただ学ぶことではなく、その国の習慣や魂を体で感じることです。結構簡単なことではありません。一般的に留学する場合自分の国でやったことを留学先の国でそのままやり続けることが多いです。せっかくの留学ですから、モノ作りをする人間として異国での創作表現を学んで下さい。作品の創作というのはモノに対する考えを作ることです。新たな創作のためには絶対忘れてはいけないことである。将来、自分の創作活動のため、現在の留学生生活を大切に、基礎として新しい発見の出発点になってほしい。」とおっしゃった。

それから6年、来日してから8年目になった。異国でのモノ創りを続けているのは先生のお蔭である。

今日、自分の夢を追うことと共に創作を楽しんでいます。

さあ、明日も新たな創作を楽しく、胸を張って一生懸命頑張ろう。

青春時代を過ごした場所

漆工 沈 明 姫



沈 明 姫 (Sim Myoung Hee)

1971年 8月 1日生
 1995年 2月 韓国 釜山女子大学校 卒業
 1998年 4月 京都市立芸術大学美術研究科研究生
 入学
 1999年 4月 京都市立芸術大学大学院美術研究科
 工芸(漆工)専攻修士課程 入学
 2001年 3月 京都市立芸術大学大学院美術研究科
 工芸(漆工)専攻 修士課程 卒業
 2001年 4月 京都市立芸術大学大学院美術研究科
 漆工領域 博士(後期)課程 入学
 現 在 京都市立芸術大学大学院美術研究科
 漆工領域 博士(後期)課程 3年次
 在学中

受 賞

1993年10月 大韓民国漆公募展 出品 特選
 1995年 2月 釜山女子大学 卒業式
 釜山市長賞 受賞
 2001年 3月 京都市立芸術大学 修士課程
 修了制作展 大学院市長賞 受賞
 京都市立芸術大学 修士課程
 修了制作展 買上げ賞 受賞
 2003年 8月 第6回螺細漆器祭
 企画招待展「大韓民国漆文化協会展」
 会長賞 受賞
 2003年10月 第17回京都芸術祭美術部門
 国際交流総合展 京都府知事賞 受賞
 2004年10月 第18回京都芸術祭美術部門
 国際交流総合展
 京都府国際センター賞 受賞

個 展

2002年12月18日～12月27日
 初個展 art spaceK (大阪)

1997年の夏、見学のために初めて京都市立芸術大学に訪れた時のことを懐かしく思い出します。昨年3月に退官された漆工の新海先生が、まだ日本語が分からない私に京都駅を教えるのに大変苦労していらっしゃいました。それからの7年間は瞬く間に過ぎてしまい、私の京芸生活はあとわずかで終わろうとしています。振り返ってみるとため息と同時に笑みが浮かんでなりません。

ここで過ごした日々は、日本語の上達につれ私自身の人格も成長していった様に思われます。26才に研究生としてこの学校に入学した時、その当時は自分自身立派な大人だと思っていましたが、今考えると恥ずかしくて顔が上がらないくらい未熟な自分ばかり思い出されます。

日本での8年間の生活の内、この学校で過ごした7年を語ることは、私にとって日本=京都芸大と言える程大きなことです。

様々な出来事や出会い、特に日本人との付き合いの中、自分より相手や周りとの調和をおもむかせる日本人の気質からいろんなことを学んだと同時に、自分自身が大陸的な気質から随分と変化していることも自覚する最近です。

日本人的な穏やかな情緒や、直線的に自分の意志をあらわにしないでしなやかに人間関係を創ろうとする思いやりは留学生の私は随分すくわれたと思うし、同時に個人主義が発達していないが故の解り難さや誤解もあった中でだんだんと自分の性格も日本に溶け込んでいたのでしょう。

そして、他の学校に比べると留学生の人数が大変少ないためか留学生同士の交流も多いように思われますが、外国人同士でのコミュニケーション手段は日本語で、その日本語が片言でしか話せなかったり、難しい単語を使っていなくても日本人と話すより深いところまで理解しあう瞬間に、なぜかほっとする自分を感じることもありました。母国語が違う国に暮らしていて、自分では適応していると思っても、普段の日本人との付き合いに気がつかない内に疲れているのかも知れないと思った記憶もあります。

また母国で出会う韓国人と、日本で出会う韓国人がまた違う感じだったことは、人というものをあらためて考えさせてくれる不思議な体験でもありました。

過ぎてしまった時間は、その長さとは関係なくいつでも‘あつという間’と表現してしまうのですが、私にとってこの7年間はただ単に芸術を学ぶために留学した事の結果を得られたと言うだけではありません。私と言う人間が大人になって行くために必要な時間であったし、これからの人生に大きく関わる人達とも出会え、何より自分のなかで制作してゆくという決心が固まる素晴らしい実りをもたらした日々なのは、他には代えることの出来ない真実なのです。京都芸大で過ごした日々こそが私の青春時代といえます。

京都芸大に来た「きっかけ」

音楽学 ピーター・ヘッド

日本に興味を持ったのは十代前半のことだった。日本ではあまり知られていないようだが僕の母国オーストラリアでは多くの高校で選択外国語として日本語を選択できる。僕の通っていた高校では日本語、ドイツ語、フランス語の中から選択でき、僕は日本語を選択した。

これは熟考の末の決断ではなく、友達の何人かが日本語にしたから、という軽い気持ちからであった。このようにきっかけは偶然的なものであったが、最早、今日まで十年以上に渡り日本と何らかの形で関係が続いており、その中の4年近くを日本で過ごすことになったわけである。

僕は、オーストラリアで大学に入学する前から、いつか日本に留学できたらいいなと思っていた。しかしオーストラリアの芸術大学で音楽を勉強していた時には、日本に行く機会がなかなか見つからなかった。結局、向こうの大学を卒業してから研究生(後に大学院生)として日本に留学することとなった。

京都芸大に行くことになったのも、やはり計画的というより偶然的なものだった。僕のオーストラリアでの知り合いに、偶然にも京都芸大の知り合いがおり、その二人の知り合いを通して連絡を取り合った。そして合計三年間、京都芸大で勉強することになった。

京都芸大の第一印象は、それまで通っていたオーストラリアの大学と少し似ていた。まず、生徒数が少なく、芸術専門(向こうの大学はダンス、映画、演技学科もあったが)で、どちらかといえば、こぢんまりした感じの大学という点で似ており、学生達がいい意味で少し個性的な格好をしているのも似ていた。

音楽棟に入るとアリの巣のような数階建ての建物の無数の教室から、ふわっとした何十人もの楽器練習の音が混じり合い漂ってくるのも、どこなく懐かしい雰囲気を醸し出していた。異なっていたのは、練習部屋が空いているのに部屋の外で楽器を練習している人が沢山いたことである。これはいつか、だれか練習している本人に理由を聞いてみようと思っている。しかし、今まで勇気を振り絞れず、未だにその謎は解けていない。

また向こうにいた時と同じく、自分は音楽専攻であったが、美術専攻の人の方が僕にとってより親しみ易かった。京都芸大に来て間もない頃、主に友達を作るためにクラブに入り、クラブのメンバーの95%ぐらいの人が美術専攻の人だったというのも影響していたかもしれない。

因みに、京都芸大でのクラブ活動は大変面白かった。バレーボール部に一年半ぐらい、軽音楽部と祭部に二年ぐらい参加させてもらい、みんなの持つ熱意と粘り強い頑張りに驚いたものだった。特にみんなが「芸祭」を自分達で素晴らしいイベントにするために、どれだけ自分の時間を割いて働いたかを見て感激した。これはよく言われる日本の団結主義の証かなと思ったりもした。

これ以外にも、食堂の出し物、先生との接し方、学生の勉強へのあり方など、オーストラリアの大学の最も根本的なところ、学生と先生、つまり「人」に関しては、世界どこへ行ってもそれほど変わらないのだと思った。でもそれを徹底的に実感するためには、恐らく外国に行って実際勉強するしかないと思う。だからこそ、京都芸大で勉強した時の思い出はこれからも大切にしていきたい。京都芸大勉強できたことがまた何かの「きっかけ」になるかもしれない。

演奏旅行を終えて

中村 公俊



音楽学部の学生は正規の授業とは別に、毎年休暇を利用して自主的な演奏旅行を行っています。その目的は、子どもたちに音楽の喜びを知ってもらい音楽の底辺を広げる事です。われわれ学生にとってはレパートリーの拡大、短期間での曲の仕上げ、アンサンブル技術の向上、学生同士の団結、といった得がたい体験をできる場でもあります。

今年は9月13日から3泊4日で三重県の伊勢志摩地方に行ってまいりました。音楽学部の3分の1にあたる約80名が、オーケストラと合唱のメンバーとして参加し、6つの小・中学校での演奏と一般公演を行いました。曲目は、「剣の舞」、「乾杯の歌」、「管弦楽の為のラプソディー」、「パールギェント組曲」、「ラデツキー行進曲」等々。学校公演では、楽器紹介や指揮体験コーナーを挟んで、最後に各学校の校歌と「翼をください」をオーケストラ伴奏で歌ってもらい締めくくりました。小学生から届いた手紙には、「音楽が嫌いだったけれど好きになった」「楽器を習いたい」「将来は京芸に入りたい」「来年も来て欲しい」など、とても嬉しい言葉が綴られており、どの公演もとても喜んで頂けたようです。われわれは子どもたちの素直な反応や楽しそうな表情を見ることができ、演奏をする楽しさや、音楽の素晴らしさを再認識できました。

しかし、問題もありました。かつては北海道にまで遠征をした事もあるほどの大規模な行事だったようですが、近年は財政難のあおりで、規模を縮小せざるを得なくなりました。援助金削減のあおりは参加学生の負担金増にも繋がっています。もうひとつの問題は責任体制です。ここ数年は、先生方に協力を仰ぐ事も少なくなり、学生が勝手にやっている…といった感じになっていました。顧問・引率の先生がいらっしゃらないことにより、実行委員にかなりの責任がかかっていました。今回、財政と責任体制の両面で協力を仰ぐため、教授会に要望書を提出しました。今年は、指揮の増井先生が指揮者兼顧問として全面的に協力して下さった事をはじめ、各専攻の先生方、事務の方々が私たちのする事に協力やアドバイスをして下さいました。しかし、金銭面の問題は全く解決していません。これに関しては、かなり時間がかかりそうです。

今年はほかにもいろいろ見直しを加えた点があります。例えば、演奏旅行が始まって以来続いていた先発隊(個人の車でトラックと共に移動し、先に着いて打楽器の積み下ろしやセッティングをする係)を無くしました。これにより、全員がバスでの移動となり、安全になりました。セッティングがスムーズに行われるか心配しましたが、今までよりも短い時間で出来、大成功でした。また、プログラムに関しては、「森の熊さん」や「ドレミの歌」等をやめ、クラシック曲を多くしました。プログラムに関しては、自分たちを中心に考えるか、小学生を中心に考えるかでだいぶ違ってきます。毎年同じものをやる必要は全くないわけですし、小学校にお願いしたアンケートの結果も参考にして、今後も試行錯誤しながら、良いプログラムを作っていく必要があると思います。

学生が自主的に始めた演奏旅行ではありますが、国公立の独立行政法人化が進む今の時代、学校にとって、知名度を高めたり、地域に貢献する(朱雀第2小学校で京都公演を3年前から行っています)という点で有意義だと思います。まだまだ解決しなくてはならない問題は多くありますが、公演先での喜びの声を大切に、学生と学校が協力し合って長年続いている伝統をこれからも守ってほしいと考えております。

最後になりましたが、学生を代表して、今回の演奏旅行に協力して下さった全ての方々へ心から感謝申し上げます。ありがとうございました。

日本伝統音楽センター 教員の紹介



後藤 静夫

現場からの風

就任して半年、京都の人たちはなかなか大阪まで文楽を見に行けない(行かない?), 何か機会が作れないかが話題になった。そこで伝音センターの主催する「公開講座」の枠を利用して文楽の紹介をすることにした。大学にも周辺の皆さんにもいくらかの貢献もでき、同時に小生の研究対象・姿勢等を端的に知っていただけるのではないかと考えた故である。開催に伴う諸問題もセンター内外の皆さんのご協力によって何とかクリアし、10月27日急に訪れた寒さの中開催できた。内容に関しては皆さんのご評価に委ねるのみだがともかくも無事終了できたことを感謝したい。

その後アンケート等を読ませていただき面白いことに気付いた。一般の方の感想・意見はともかく、音楽学部の学生諸君のそれは小生がこれまでにあまり目にしたことがないものだった。一言で言えば文楽の芸能・戯曲・技芸としての、つまり文楽総体の本質を実に的確に捉えている。それも2, 3にとどまらず半数以上と思われる人達がそうであったことは正直驚きであった。西洋音楽との違いと共通性, 太夫と三味線弾きの関係, 発声法や音の表現, 人形遣い3人の関係, 文楽の現代性…それらを自分の将来目指す姿に直結して考えている。

同じ芸術を目指す者たちである故だろうか。私にとってこの結果は文楽や芸能の現場からの風に助けられ後押しされたものに思える。若者を見直すとともに、私自身方向性を示されたように思う。文楽にそして学生諸君に「ありがとう!」

(日本伝統音楽研究センター 後藤 静夫)



竹内 有一

「伝統」のススメ!?

就任したばかりの新研究棟の入口に、「日本伝統音楽」という看板が掲げられている。今は当センターの標語の一つとして愛着を育てているが、正直、当初はずいぶん大仰な名前だな、と戸惑った。「伝統」という言葉と概念を正面から見つめ直すような機会が少なかったことと、世間一般で使われる「伝統」という言葉に外向きのよそよそしさを感じていたためであろうか。一方、日本音楽に馴染みのない人にとっては、「伝統」と聞くだけで重苦しさを感じさせたり、誤解を招いている面もあるかと思う。

たとえば、西洋の芸術系の音楽は「クラシック音楽」と呼ばれることがあるが、どういう訳か、「西洋伝統音楽」とは決して呼ばれない。「西洋音楽は日本音楽とは違って、『伝統』の世界の産物ではないから…」とオタク趣味の愛好家に原因を説かれたことがあるが、演奏・楽譜・教習といった「伝承」に関わるシステムや意識の差異、あるいは悪い意味での「因習」を捉えたに過ぎぬ発言であろう。そもそも古今東西、「伝統」のない文化はありえない。

世間では「伝統」の付く言葉がずいぶんと「安売り」されているようである。日本・東洋系の文化に対して、あるいは自分の生息圏外の因習的で理解し難い、いわば「外なる」民俗や風習等に対して、「何となく」冠する例が多いようだ。それはともかく、「西洋伝統音楽」という言葉が一般化していたら、「日本伝統音楽」も馴染みの少ない人に今よりわかりやすく説明できるんじゃないか、日本音楽に対して変に構えられることも少なくなるかな、などと無意な空想もしてみるのだが、いかがだろうか。

(日本伝統音楽研究センター 竹内 有一)

近況報告

東京芸藝大学 助教授 河野 文昭



河野 文昭

撮影者：林 喜代種

兵庫県立神戸高校在学中にチェロを始める。京都市立芸術大学にて黒沼俊夫氏に師事。芸大卒業後、1982年に文化庁在外派遣研究員として渡米、ロスアンゼルスにてG.ライター氏に師事。83年渡欧、ウィーン国立音楽学校にてA.ナヴァラ氏に師事。

1984年11月、日本フィルハーモニー交響楽団定期演奏会にてフィンランドの現代作家コッコネンのチェロ協奏曲の日本初演(渡邊暁雄氏指揮)を行った他、大阪フィルハーモニー交響楽団、東京フィルハーモニー交響楽団等多くのオーケストラと共演する。アンサンブル of トウキョウ、紀尾井シンフォニエッタのメンバーとしてニューヨーク・バッハ・モーツァルトフェスティバルの参加を始めとし、ドイツ、イタリア、フランス、オランダ、オーストリー等で公演。

ソロリサイタルとしては、81年、デビューリサイタルを大阪で開催。以降、東京、京都、福岡、広島、神戸、静岡等各地で行う。91年～95年の五年間には「河野文昭ワークショップ」と題し、毎年二晩ずつ異なったプログラムでの演奏会を京都で開催した。

室内楽においては、パーヴェル・ギリロフ(Pf.)、ローランド・ドガレイユ(Vn.)、ウルリッヒ・コッホ(Va.)、ゲーリー・カー(Cb.)、ヴォルフガング・シュルツ(Fl.)、インゴ・ゴリツキ(Ob.)、コチアン弦楽四重奏団、パノハ弦楽四重奏団等、海外のアーティストと多数共演。98年より静岡音楽館(AOI)のレジデントカルテットのメンバーとして、現代音楽も積極的に加えたプログラムでの活動も始めた。93年～2003年、ゆふいん音楽祭音楽監督の他、各地の音楽祭、講習会に講師として参加。

81年第50回日本音楽コンクールチェロ部門第一位。86年京都市芸術新人賞を始めとし、87年京都府文化賞奨励賞、2004年京都府文化賞功労賞等、受賞多数。

現在、東京芸藝大学助教授、愛知県立芸術大学講師を務める。

現代を代表する作曲家の一人、ルチアーノ・ベリオの「セクエンツァⅩⅣ」(無伴奏チェロ作品)を昨年5月に日本初演した。演奏至難ではあったがとても刺激的、新しい音楽世界に触れる喜びを味わった。一方で、何百年の時を経ても色褪せず人々を魅了しつづける音楽、例えばバッハやモーツァルトやベートーヴェンがそうであるが、最近は特にベートーヴェンの音楽に強く惹かれていて、演奏にもレッスンにも力がこもる。

東京藝大に勤めて12年。昨年独立行政法人として新体制がスタートし、またかねてより大学院教育の充実を促される中、これからの芸術系大学のあるべき姿や今後の音楽界を担う学生達の将来を考えながら、今、私なりに何が出来るかを模索している。

その試みの一つとしてこの数年、複数の科の先生や学生が集まり一つのテーマを掘り下げるといふ、大学院ならではの懐の深さを利用した授業を行っている。担当する「器楽特殊研究」というクラスでベートーヴェンのチェロソナタを取り上げ、チェロ科以外にも参加を募ったところ、ピアノ、ヴァイオリンや古楽科の学生達が多数集まるようになった。そしてゲスト講師としてバロックチェロの鈴木秀美氏、ピアノの植田克巳教授や京芸非常勤講師で妻の河野美砂子など、学内外の一家言の持ち主がボランティア参加してくれている。先生方は現場での経験をもとに熱っぽく語り、話はチェロソナタだけにとどまらずピアノソナタ、トリオ、カルテットや交響曲にまで及び、学生達からも次々興味深い発言が出てくるようになってきた。今ではクラスの活気を楽しむだけでなく、新しいアイデアに気づかされることもあり、私自身にとって大きなエネルギー源になっている。

明治維新以後日本に入ってきた西洋音楽は、我々の親の世代までは、一種のあこがれであり大きな価値を持っていた。しかし現在では価値観が多様化し、ワールドミュージックの一部として様々な受け止められ方もされているようだ。だがポピュラーミュージックのように一度聴いただけでも楽しめる音楽とは違い、何百年も聴かれ続けてきたクラシック音楽には、繰り返し聴くことでその味わいが深まっていく喜びがあることは確かである。現代のめまぐるしい世の中、このように時間のかかる類の音楽を日常の楽しみとして受け入れられる人々、すなわち我々演奏家にとってなくてはならない聴衆を、今後一人でも多く増やすことが出来るのかどうか、正直なところ今はまだよくわからない。

今年、ベートーヴェンの「ピアノトリオ全曲演奏会」を京都で企画している。(2005年4月16日、7月2日、9月24日、府民ホールALTIにて。Vn. 京芸の四方恭子先生、Pf. 河野美砂子) そのコンサートでは、ベートーヴェンに関わる事、あるいは我々が何を面白いと感じて演奏しているかについて聴衆に語りかけるなど、何か新しいアイデアを盛り込んで、多くの人に会場に足を運んでもらえないかと思案しているところである。